



## はじめに

ディテール (detail) といえば、一般には「細かな部分」とか「詳細」といった意味で使われますが、建築の世界では「詳細図」となり、一般の図面を、より細かく、精密に描くことを「ディテールを描く」といいます。描く対象は「おさまり」といって、建築の部材と部材が、あるいは部材と部品が、あるいは面と面とが出合う部分のことをいいます。

建築史家であり建築家でもある藤森照信さんは、「つまるどころ、ディテールのポイントは、高精度・スリム・シャープ・出隅・入隅だ」といいますが、ディテールにはたしかにその一面があります。私が、ようやく自分ひとりで図面らしきものが描けるようになったころ、担当した建物の矩計図をまとめあげて宮脇檀さんのチェックを受けたとき、訂正指示で真っ赤になった図面が戻ってきて、端に「ディテール馬鹿になるな」と書き込みがありました。そのころは、ディテールとは、藤森さんのいうように、詳細・高精度・スリム・シャープに、びっしり描き込むものだと思います。

しかし、ディテールは、それだけで単独に存在するものではなく、あくまでも、ある建物の設計図書の一部で、常に他の図面や仕様書などと全体の中でのバランスがとれているかを検証しながら描くことが大切なポイントになるのだよ、と宮脇さんに諭されたのです。

さて、建築のディテールを学ぶとしたらどのようなアプローチの仕方があるのでしょうか。これに関しては、専門の学校でもきちんと整理して教えてくれるところがなかなかありません。私たちの年

代では、ひたすら諸先輩の図面を下敷きにしてトレースしたり、コピーしたりすることで、「詳細図」の描き方を手に覚え込ませました。設計事務所に勤めれば、新人の仕事は、このようなトレースやコピーでした。再び藤森さんのことばを借りると、ディテールは「言語化、体系化されない。体験によってのみ習得される。つまり、ディテール道だ」というのはこのことでしょうか。ところで、このようにして覚えるディテールは、「詳細図」という目に見える、たとえてみれば「おもて」のディテールとっていい分野です。

でも、これだけでは、覚えたものの繰り返しはできても、まったく新規のディテールを創作する、という場面では手が動かなくなってしまう可能性があります。実際のところ、ディテールが創作できるのは設計の醍醐味なのですが……。

実はディテールには、それが生まれた背景があり、よって立つ考えがあり、これが、設計者の思想とか哲学といわれる部分になるわけです。その内容は人によってさまざまで、たとえば、宮脇さんは東孝光さんの設計には「ディテールがない」といいました。しかし、これは宮脇さんの見方での話で、東さんは「私には私のディテールがある」と反論されています。この思想とか哲学は、いわば目に見えない「うら」のディテールとっていい部分で、ここのところを理解していると、ディテールが読みやすくなり、創作をするときの手がかりになります。

本書では、どのような見方、考え方があって、どのようなおさまりが出来てきたのかを見てもらうことでディテールの「うら」を理解する手がかりにしてもらいたいと、ディテールの見方・考え方を「見える」「見えない」「見せる」「見せない」「足す」「引く」「なじませる」「切る」という八つの項目に分けて解説しました。この見方・考え方は、私が宮脇さんのところで習得したものがベースになっていて、主に、住み手にとって気持ちのいい住まいを設計するとき、私はどのように考えているかをまとめたものです。本書が、皆さんがディテールを創作するうえでのヒントになってくれたら幸いです。

2012年初冬 山崎健一

はじめに 003

# 見える

01	はっきり見える	几帳面	012
02	やさしく見える	丸面	014
03	引き締まって見える	ピン角	016
04	あたたかく見える	あかり	018
05	カメラには見える	あかり	020
06	低く見える [1]	軒	022
07	低く見える [2]	天井	024
08	気配が見える	吹き抜け	026

# 見えない

09	厚みが見えない [1]	石の裏打ち	030
10	厚みが見えない [2]	木の無垢材	032
11	反りをおさえる	吸い付き棧・端ばめ	034
12	開きをおさえる	しゃち・いなご・引きどっこ	036
13	気遣いに気づく	階段	038
14	相手が見えない [1]	空気・風	040
15	相手が見えない [2]	音	042
16	相手が見えない [3]	足触り(吸放湿)	044
17	相手が見えない [4]	足触り(安定感)	046
18	相手が見えない [5]	湿気	048

# 見せる

19	厚く見せる	屋根	052
20	薄く見せる	鴨居	054
21	面として見せる	打ち放し	056
22	線として見せる	木材	058
23	目地を見せる	化粧目地	060
24	ひとつに見せる	吉村障子	062
25	水平に見せる	錯視	064
26	水を見せる [1]	演出(見立て)	066
27	水を見せる [2]	軒樋	068

# 見せない

28	邪魔者を消す	換気装置	072
29	視界からはずす	通風装置	074
30	引き戸を見せない	戸袋	076
31	引き戸の敷居を隠す	敷居レール	078
32	ささら桁を消す	階段	080
33	設備機器を隠す	空調	082
34	ドア枠を消す [1]	親子扉	084
35	ドア枠を消す [2]	パネル枠	086
36	コーキングを隠す	雨仕舞	088
37	照明器具を消す	光源	090

# 足す

38	安易に足さない	開いた隙間	094
39	二重三重にかまえる [1]	床下地	096
40	二重三重にかまえる [2]	雨仕舞	098
41	二重三重にかまえる [3]	屋根下地	100
42	二重三重にかまえる [4]	トップライト	102
43	機能を複合する [1]	2階リビング	104
44	機能を複合する [2]	窓際	106
45	機能を複合する [3]	トップライト	108
46	機能を複合する [4]	階段	110
47	機能を複合する [5]	窓	112
48	機能を複合する [6]	郵便受け	114
49	合板の捨て張りを足す	下地	116

# 引く

50	要素を減らす [1]	モノリシック	120
51	要素を減らす [2]	単色	122
52	要素を減らす [3]	ドアの取手	124
53	要素を減らす [4]	反射率	126
54	要素を減らす [5]	軒の厚み	128
55	そぎ落とす [1]	天井ふところ	130
56	そぎ落とす [2]	ふところゼロ	132
57	そぎ落とす [3]	間仕切り壁	134

# なじませる

58	風景に溶け込む	屋根	138
59	スケール感を合わせる	地域の秩序	140
60	既存の建物に合わせる	長屋門	142
61	地面になじませる [1]	基礎部分	144
62	地面になじませる [2]	日干しれんが	146
63	地面になじませる [3]	テラスの先端	148
64	内と外をつなぐ [1]	花道	150
65	内と外をつなぐ [2]	マル	152
66	内と外をつなぐ [3]	パーゴラ	154
67	手が触れる	手摺	156
68	からだが触れる	食卓まわり	158
69	家となじませる	照明器具	160
70	つながりをほのめかす	出隅	162

# 切る

71	構造体を分離する	混構造	166
72	構造体を上下に分ける	混構造	168
73	地面と縁を切る [1]	斜面地	170
74	地面と縁を切る [2]	空中	172
75	地面と縁を切る [3]	造成地	174
76	周辺に背を向ける	コートハウス	176
77	悪しき例を断つ	北側外観	178
78	視線を切る	ルーバー	180
79	切ってつなぐ [1]	中庭	182
80	切ってつなぐ [2]	キッチン	184
81	切ってつなぐ [3]	免震	186
82	切ってつなぐ [4]	結界	188

# 見える



## 01 はっきり見える

### 几帳面

韓国の建築家、故金寿根氏の空間社で紹介された権泰宣さんに「几帳面が好きなのは韓国のほうですよ」といわれたとき、「あれ？几帳面って、むしろ日本人の特質ではなかったですか」と思わず問い返しました。そうしたら「これは、建具の面の話ですよ」と権さんは笑って説明をはじめました。

もののエッジをおさめる手法のひとつである「面」の種類の中にある「几帳面」というのは、平安時代の調度品である「几帳<sup>\*</sup>」の柱部分に使われた「面」処理のかたちで、その名が由来するといえます。今、「几帳面」といわれているものと、「几帳」の柱に使われた「面」のかたちとは、一致しているとはいえず、「几帳面」にもいくつかのバリエーションがあるようですが、「几帳面」の一般的なかたちは、エッジの部分が鋭角にできているのが特徴です。そのため、「几帳面」でおさめたものは角（かど）の切り替わる部分の明暗の違いがはっきりとしていて、かたちがシャープに見えます。つまり、「几帳面」で処理をすると、もののかたちが明瞭に見えるのです。これを、韓国の人たちが好む、と権さんはいうのです。

もののかたちがはっきりと見えるのを韓国の人々が好むのは、韓国の気候風土に理由があるのではないかと権さんはいいます。韓国は大陸性気候の影響で、湿度が低く、空気が澄んでいることが多く、普段目にしている風景が、コントラストの強い、かたちがはっきり見える状態で、それに慣れ親しんでいるからなのだ、ということです。

それに対して、海洋性気候の影響を受ける日本では、一般に湿度が高く、「もや」がかかった空気の状態で見えていることが多いので、もののかたちが、コントラストの弱い、和らいだ表情になっているのに慣れている。したがって、もののエッジを処理するときも、角（かど）の切り替わる部分で明暗の差が強く出ない方法を、日本人は好むのだ、とのことでした。

この説を、どの程度信じてよいのか、いろいろと検証してみなくてはならないことがありそうですが、「面」のとおり方ひとつで、もの見え方がガラッと変わってしまう、ということは事実です。「面」の違い、見え方がどう変わるか、ということについては、デザインをするものとして心得ている必要があります（ちなみに自然環境の人間に与える影響について、和辻哲郎の『風土』が参考になります）。

<sup>\*</sup>  
几帳（きちょう）  
平安時代に現れた可動の障屏具のひとつ。几（おしまずき）に懸ける帳（とばり）。

韓国・宗廟の壁（塼）

レンガ積みや石積みを目地仕上げを出目地にする例を、韓国ではよく見かける。出目地にすると、目地自体に陰影がついて、目地の網目模様によりハッキリ見えるようになり、装飾効果がでてる。



## 02 やさしく見える

やさしく見える「面」とは、ものの明るい部分と暗い部分とが出合う境目の明暗の差（コントラスト）がきつく見えないように工夫したおさめ方のことです。明と暗、白と黒、聖と俗など、対立するものが出合う部分を直接つなぐのではなく、双方を取りもつ、白でもない、黒でもない中間の性質の要素を用いる手法は、たとえば、庭と座敷の間に広縁や土庇の空間を設ける、歌舞伎や能では客席と舞台をむすぶ、花道や橋がかりがあるなど、日本の文化に広く見られるもので、それが「面」のとり方の好みに現れているのかもしれませんが。

エッジのコントラストをぼかす面の代表的なものは「丸面」です（坊主面、R面ともいいます）。文字通り、角（かど）を丸くするので、明るい部分から暗い部分への変化が、どこで切り替わったのかわからないくらいあいまいです。

直交するエッジを45度の角度にとる「角面」もコントラストをぼかす効果があります。それは、この「面」に当たるあたりが明と暗の中間の状態になるからです。面の幅が1mm程度のものを「糸面」といい、10mmくらい広がると「大面」と呼びますが、幅がほんの少し変わるだけで印象が変わるので使い方に注意します。見え方は、柱や棧などの全体の幅との関係も影響してきます。

ところで、そもそも「面」とは、なんのためにとるのでしょうか。おさめ方から見れば、ものの角が立っていると、なにかが当たったときに、欠けたり傷ついたりしますが、面をとってあると、それを避けたり、被害の程度を軽くすることができます。つまり「材の保護」という役目があります。また、面をとったほうが（面の種類にもよるが、糸面などの場合）材がすっきり通って見えます。仕上がりの「通直性」、つまり真っすぐ通っていることを表現できるのです。

また、面のかたちにはいろいろな種類があります。とりわけ、建具や家具の世界で使う面は種類が多く、これらは、縁飾り、つまり「化粧」として使う意味合いが強くなります。

面をとる理由は「保護」や「表現」や「化粧」だけではありません。角の立っているものに、人がうっかり当たったら、痛いばかりでなく状況によったら怪我をする恐れがあります。持ち運ぶ際にも手を痛める可能性があります。つまり、面をとることは「安全」という点から見ても、とても重要なことなのです。

### 丸面

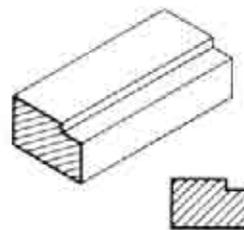


丸面面の例。エッジがはっきり見える

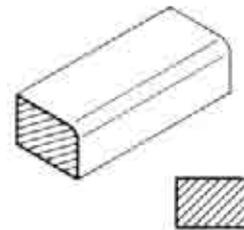
### 面とりの種類

建築の仕上げで「面」をとる、ということにはいろいろな意味や目的がある。図のようにいろいろな面の種類があるのは、面の取り方ひとつで、もの見え方がさまざまに変えることに対応させるためである

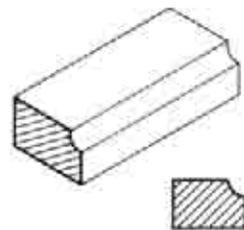
決り面



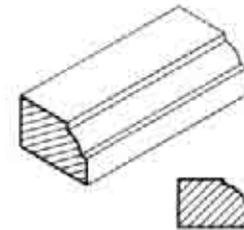
丸面



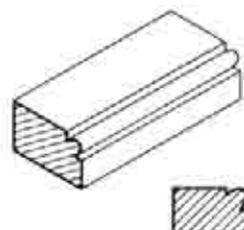
さじ面



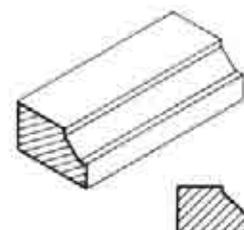
ぎんなん面



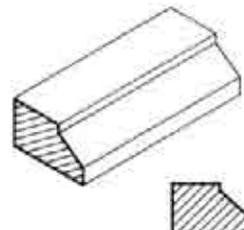
几帳面



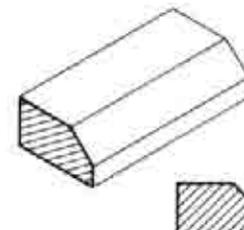
底几帳面



片几帳面



切り面（猿顔面・角面）



## 03 引き締まって見える

### ピン角

面をとらない仕上げ、という方法があります。ものの角（かど）を直角につくるのです（面なし、あるいはピン角などといいます）。几帳面ほど鋭角にするわけではないけれど、明暗のコントラストがはっきり出るので、存在感があって、表情はキリッと引き締まって見えます。

もちろん、角（かど）が立っているから、ものが当たれば欠けたり傷になったりしやすいし、人が当たると怪我をさせる可能性だってあります。そんなリスクがあっても、引き締まった表情の魅力で、使ってみたくになります。

たとえば、コンクリート打ち放し仕上げの出隅。ここは、普通なら45度の面木を使います。木の柱に面取りすると違って、小さくても面幅が21mmにもなるから、仕上がった感じはかなり切れ味が鈍くなります。これをピン角にすると、まず、施工側がいやがります、コンクリートがうまくまわらない箇所ができたり、ノ口がもれるところができたりで、きれいなピン角ができない恐れがあるからです。うまく打てても、型枠の解体のときに、欠いてしまう可能性もあります。それでも、引き締まった表情の仕上がりは手に入ります。もし、この表現を選んだのであれば、ここで、少しぐらいの欠けは補修しないことが大切。打ち放し面の多少の気泡あとやジャンカをそのままにしておくのと同じです。補修によって、折角の切れ味が鈍ってしまう可能性があるからです。

フローリングの本実部分の面をとらない方法もあります。面なし材で仕上げた床面は、面によってできる筋がなくなるので、まるで、1枚板で仕上げたかのようにすっきりと見え、心地よい緊張感が漂います。面がピン角であっても、この場合、材料の搬入と施工に注意すれば角（かど）が欠けるとか、人を傷つけるといった心配がありません。

一般に、本実部分に面をとるのは、下地の不陸、材厚の不揃い、乾燥等による床材の収縮や反りなどの原因で、床板の目違いや隙ができたとき、できるだけ目立たなくしてあげよう、という狙いがあるからなのです（このようなことに備えて「逃げ」のために面をとることもある）。したがって、面なしにしたときには、このことを頭に入れて、材料の選定（木取りや乾燥）、加工（精度）、そして施工に、十分気を遣ってやらなければなりません。



S字面の例。面の部分のあかるさが、右面と左面との中間になっている



切り面の例。光の当たっている右面と、それに直交する左面とのあかるさの差に対して、面をとっている部分は中間のあかるさになっている

#### Lif 集合住宅／鈴木 侑

ピン角のコンクリート打ち放しをきちんと仕上げるためには、適正な配筋と型枠の間隔の確保、ノロ漏れを起こさない型枠の組み方、コンクリートの適正な配合管理、注意深い打設や型枠ばらしなど、多くの気配りが必要



## 04 あたたかく見える

あかり

住宅で使う照明器具の光源を大別すると、白熱灯と蛍光灯になります。白熱灯は「赤っぽい」あかりで、一般にあたたかく見えます。それに対して、蛍光灯は「青白っぽい」あかりで、冷たく見えるのが特徴です。

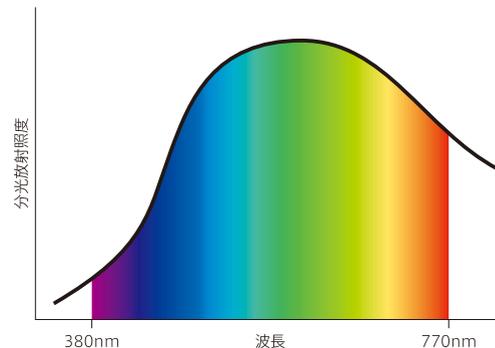
あかりは、光を出す物質の種類や、その温度、環境、状態によって色合いが異なります。たとえば、鉄を熱していくと700度くらいから赤黒くなり、温度が上がるにつれてオレンジ色になります。この色合いを温度で表したのが「色温度」で、単位は絶対温度のK(ケルビン)を使うので、鉄が赤黒く見える700度くらいは1000K程度と表現します。太陽光では、朝日、夕日が2000K程度、よく晴れたお昼ごろで6500Kくらいです。ちなみに、白熱灯は2000～2800K、蛍光灯は3000～6500Kくらいです。

つまり、白熱灯のあかりは、朝日、夕日の色合いに近いわけですが、これが、住宅の光源として大きな意味をもつのです。というのも、人をはじめとして、地球上の生き物はみな太陽の恵みを受け、太陽の運行に従って息づいています。古来、人は日の出と共に起き、日中は活動し、日の入りとともに休息につくという生活を、そのリズムがからだに刷り込まれています。一日の仕事を終え、帰宅したときに夕日の光色に近い白熱灯に迎えられると、ホッと気持ち落ち着くのは、それが「休んでいいよ」「おつかれさま」という、癒し効果のあるサインだからなのです(ちなみに、6500Kという蛍光灯の昼光色で迎えられたら、もうひと働きせよ、といわれたみたいで、どっと疲れが出てしまう気がしませんか)。

光色の性質では、黄、赤味を帯びたあかりは、肌をきれいに見せ、食べ物をおいしく見せる効果があり、雰囲気をあかるく、生き生きとし、和やかにする特徴があります。一方、青味を帯びたあかりは、すがすがしい感じやすっきりとした印象を与えてくれますが、肉などの食材を赤黒く見せてしまう性質があります。ちなみに、市場が活気づいて見えるのは、新鮮な食材が並んだり、威勢のいい呼び声が飛び交うからだけでなく、裸電球の白熱灯の赤味を帯びたあかりもおおいに効果を盛り上げているからなのです。また、高級な飲食店ほど白熱灯にこだわるのには、おいしく食べてもらいたいという、ちゃんとした意味があるのです。

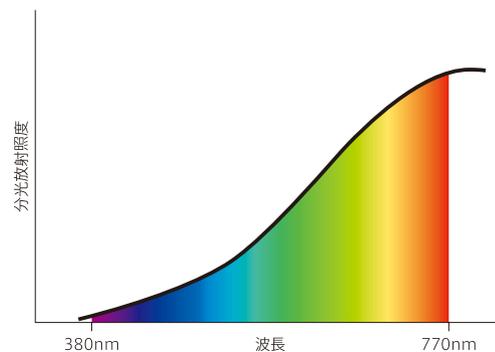
白熱灯のあかり  
屋久町の家/山崎健一

▶ 効率の良いことが優先される省エネの観点からいえばまったく分の悪い白熱灯だが、なだらかな曲線を描くエネルギー分布図を見ると、雑多な情報がそのまま入っているアナログ録音のようで、人に優しいのはこちらだ



太陽光のスペクトル分布例

太陽光は物を見るときの基準にしているあかり。エネルギー分布が連続していて、きれいな釣鐘型をしている



白熱電球のスペクトル分布例

エネルギーが赤味側に片寄っているが、きれいな連続線の分布状態になっている

